

夢でもいい。

もう一度、逢いたいと願った。

だから——

# 機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXXX

著者／流遠亜沙

---

ASSAULT-SYSTEM 文庫

少女は戦っていた。

年齢で言えば十代前半——中学生になったかどうかといった程度だ。黒い髪を左の側頭部で結った、短めのサイドポニーテール。蒼玉サファイアのような大きめの瞳。身に纏っているのは和服とミニスカートを組み合わせたような衣装。まだ伸びきらぬ手足で振るうには扱いづらそうな、薙刀なぎなたのような武器を持っている。

「……………」

少女は武器を構え、敵を見据え、攻撃の機会を窺うかががっていた。

少女が戦っている相手は——異形だった。

近い表現をするなら『スライム』だろう。不定形に蠢うごめく灰色の液状の『何か』。一般家庭にあるバスタブであれば、五つは満杯に出来る量だ。それが明らかに意志を持ち、少女に敵意を向けているのが判る。

——うるうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！

『スライム』が形容しがたい雄叫びを発し、自らの液状の身体からだの一部を弾丸のように撃ち出した。十を超える液状の弾丸が少女に迫る。

「——ッ！」

少女はその場に留まる愚を犯さない。距離を取るのではなく、むしろ『スライム』に向かって駆け出した。弾丸をかわし、かわしきれないものは武器で叩き落とす。

『スライム』が更に弾丸を撃ち出す。表情はおろか、顔に相当する部位すらないのに、その姿は狼狽うろたえているように見える。

対する少女はまるで恐れる様子がない。突進する事しか知らぬかのように、怒濤どとうの勢いで『スライム』に向かう。

慌状態わかしに陥おちったのであろう『スライム』は、馬鹿の一つ覚えのように自らの身を削り、弾丸を撃ち出し続けた。大量の弾丸は弾幕となり、少女の姿を飲み込んだ。

やがて、撃ち出すべき弾丸が尽きる。十数秒後、弾幕が晴れた『スライム』の視界に、少女の姿はなかった。死体もない。手足の一本も、肉片も、血痕すらない。

『スライム』が縮んだ身体を蠢かせながら辺りを警戒する。

——からん……。

静寂に包まれた世界に、乾いた音が鳴った。

『スライム』は音を頼りに、わずかとなってしまった身体を削り、弾丸に変えて撃ち出した。音がした茂みが地面ごと吹き飛び、音の正体が明らかになる——空伍だ。あまかん

そして——

「カグツチ——」

おとり 囷に気を取られている隙に回り込んだのだろう。『スライム』の背後に肉薄した少女が、薙刀のような武器の穂先を液状の身体に突き立てていた。

アニヒレイト 「滅せよ！」

少女が叫ぶと、武器の穂先が青白い閃光を放つ。

——うるうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!?

苦悶の声を上げる『スライム』

青白い閃光を放ちながら、機械の駆動音に似た音を発し続ける武器。武器の使い手である少女の表情が、少しずつ苦痛に歪んでいく。

そして——新たな光が辺り一帯を包んだ。

プロローグ

**At The Very Beginning**

「——みひめ。起きて、やみひめ……やみひめ」

名前を呼ばれ、誰かに身体を揺ゆすられてる。

悪いけど、今はそれどころじゃない。あの女の子を助けないと。

だって、すごく苦しそうだったから。

あんなに必死に戦ってた。

本当は怖いはずなのに。逃げ出してしまいたいくらい怖いはずなのに。

それでも戦ってた。

きつと、逃げられない理由があるんだ。戦わないといけない理由があるんだ。

だから、助けないと——

「……ごめんね？」

違う。謝る必要なんてない。

だって、誰かのために戦ってるんでしょ？

護りたいものがあるんでしょ？

だったら——

「ん！」

誰かの、掛け声と呼ぶには細こやかな咳せききが聞こえた。

それと同時に、頭頂部に鈍い痛みが走った。誰かに何かで軽く叩かれたみたいだった。

その痛みで、私の意識は目覚めた。

後ろを振り向くと、そこには見知った友達ともだちの姿。ちよいちよいと指で『前を見ろ』とい

う仕草をするから前を見ると、苦笑きりく気味ぎみの担任教師の顔があった。

「よく眠れたか、流るとお速？」

「はい、じゃなくて……すみませんでした」

瞬間的に状況を把握し、私は先生に謝った。ここは学校で、今は授業中だった。いつの間にか眠ねっちゃってみたい。

「まあいい。あと十分で今日の授業は終わりだ。もう少しがんばれ——『殿下』」

そう言っつて、先生は授業を再開した。

私はいえは、夢の内容を妙にはつきりと覚えていて、授業どころじゃなかった。



それからすぐに授業終了のチャイムが鳴った。私は半分くらい寝てみたいだ。

本当なら反省はんせいしなきゃいけないんだけど、今は——

「何だったんだろう、あの夢……」

ただの夢なんだろうけど、妙に気になる。

「それじゃあ、このままホームルームを始めるぞ。といっても、特に伝達事項はない。用のない者は寄り道せずに帰宅する事——以上だ。委員長、号令を頼む」

五時間目の授業は担任の神讓<sup>かみじょう</sup>先生だったので、毎週金曜日はそのまま帰りのホームルームに移る。

「——起立、礼。先生、さようなら」

『先生、さようなら』

委員長は私の後ろの席の友達。彼女の号令に合わせて、クラスメイト達の声が唱和する。

「おう、また来週な。皆、気をつけて帰れよ」

神讓先生がにこやかに応え教室を出ていくと、クラスメイト達もそれぞれに帰り支度を始める。私も手早く教科書やノートを仕舞い、ランドセルを背負う。金曜日は持ち帰る物が多いので、少しだけ荷物が重い。

「よし、忘れ物なし。帰ろう、くらう」

机の中をチェックして、後ろの席の女の子に声をかける。

「うん。帰ろうか、やみひめ」

私の声に応じて、その子も立ち上がる。

この子の名前は『くらう』。本名は、クラウ・P・ブラン。

すごい美人さんで、性格も見た目も大人っぽい。

私の一番の友達。

「さつきは叩いて、ごめんね。痛くなかった？」

くらうが申し訳なさそうな顔をして謝ってきた。私が授業中に居眠りをしてたのを起こしてくれた時の事だ。

「ううん。全然、大丈夫だよ。むしろ、起こしてくれてありがとう」

「そう……よかった」

ほっとしたような顔をするくらう。

くらうは真面目だ。そして、すごく優しい。見た目が大人っぽくて落ち着いた雰囲気だから、近寄りがたいと感じる子も多いけど、実際はとても話しやすい。

「でも、やみひめが授業中に居眠りなんて珍しいね。夜更かし？」

「ううん。別に、さつきも眠かった訳じゃないし。けど、気付いたら夢を見てた」

「夢？ どのなの？」

興味深そうにくらうが訊いてきたので、私は夢の内容を話した。自分でも驚くくらい、

はつきりと覚えていた。変身ヒロインみたいな和服を着て、『スライム』みたいな『何か』と戦う女の子。最後は光に包まれて、戦いの結末は判らなかつたけど。

「……へえ。ファンタジーだね」

くらうは、すごく楽しそうな顔をしてる。そういえば、くらうは読書が好きで、そういう小説もよく読んでいる。

「もしかしたら、やみひめの前世かもしれないね。もしくは、予知夢だったり」

「これから起きるってこと？ あはは、まさか」

私の見た夢をあれやこれやと推測する。もちろん、くらうも本気で言ってる訳じゃない。他愛のない普通のおしゃべりの一環。

「じゃあ、ここでお別れだね。くらう、今週は出掛けるんだよね？」

「うん。お父さんが久々にお休みだから、遊園地でも行こうかって」

「そっか。じゃあ、次に会うのは月曜だね」

「うん。また学校で」

お互いの家への別れ道で、少しだけ別れる事を惜しむ会話をする。また、すぐに会えるのに。なぜか、この瞬間には未だに慣れない。

「ばいばい、くらう」

「さよなら、やみひめ」

それでも当然、お別れの時は来る。くらうとは長い付き合いだから、『そろそろ頃合いかな？』というタイミングはなんとなく判る。

お互いに手を振り、それぞれの帰路に就く。

「予知夢、か。まさかね」

さっきのくらうとの会話を思い出して独りごちる。あまりにも鮮明に覚えていて、細かい部分まで作りこまれてた。夢っていうのは整合性がなくて、ぼんやりしてて、目が覚めたら忘れてるものじゃないかと思うんだけど。あの夢はまるで、実際にあった映像みたいだった。

「それに、あの場所って……」

足を止めて、左に視線を向ける。そこには小さな公園がある。

「ここなんだよね」

そう。なんとなく、くらうには言わなかつたけど、夢の場所はこの公園だ。

「先生は寄り道するなって言ってたけど、まだ明るいし、ちょっとくらいいいよね」

時間は午後四時を少し過ぎた頃。まだ秋だから、すぐに暗くなったりはしない。

夢の事も気になるし、それに公園には――逢<sup>あ</sup>いたい人がいるから。



「……お兄ちゃん、もう来てるかな？」

私の名前は流遠るしおやみひめ。

小学六年生の普通の女の子。

勉強の成績は中の上くらいだけど、運動はちよつとだけ自信がある。

趣味は特さ——じゃなくて……え、映画鑑賞かな。

将来の夢とかはまだないけど、最近、気になる人が出来ました。

ドラマチックな事なんて何も起こらない平穩で平凡な日々だけど、私はそれなりに楽しく暮らしています。

それはきっと、それだけで幸せな事。

これは、そんな当たり前の事に気付くまでの物語。

——『機獣少女ゾイカルやみひめ』はじまります。

## あとがき

どうも、流遠亜沙るとおあさです。

新シリーズ『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』をお届け致します。

ちよこちよこ書いてきましたが、完全新作の連載は新サイトになってから初となります。タイトルを見て「悪ぶざけもここまできたか……」と思った方もいらつしやるかもしれませんが——まあ、割りと悪ぶざけですね。

元々は旧サイト時代にやっていた看板娘のツイッター(当時 @yamihime2010 というアカウントも作りました。もう削除しましたが)で、エイプリルフルに突発的にやった『機獣少女ゾイカルやみひめ』が始まりです。

昨今、すっかり魔法少女ものがブームというか、新たなアプローチでジャンルとして返り咲いているので、自分でもやってみようかと考えた次第です。

現状では大した事は言えないので、次回掲載の第一話までお待ちください。  
はたして、『漆黒の狂襲姫』のヤミヒメと関係があるのか？  
もしくは、まったく関係のないスピノフ的なものなのか？

ただ、これだけは言わせてください——まったく、幼女は最高だぜ！

ちなみに、僕にとつての魔法少女は完全に『魔法少女リリカルなのは』です。

子供の頃に観ていたのは『魔法のプリンセス ミンキーモモ』(91年版の林原さんがモモを演じた方)。内容自体はまったく覚えていませんが、林原さんの演技や台詞の言い回し(モモに限らず)が妙に印象に残っています。

僕の作風だと『まどか☆マギカ』みたいになるのではないかと思われる方もいらつしやるかもしれませんが、それはいいです。今更、似たような事をやっても仕方ありません。可愛い少女が恋をしたり悩んだりキラキラしたりするハートフルな作品(予定)です。そうなるかええな……。

流遠亜沙の書く魔法少女ものに期待——は、ただだかなくて結構です。多分、いつも通りです。

早いですが、ここらで謝辞を。

まずは『くらう』こと、クラウ・P・ブランの名前の使用の許可をくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。出来得る限り可愛く書かせていただきます。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。相も変わらずな内容になるかとは思いますが、お付き合いいただけると嬉しいです。

それでは、次は第一話でお会いしましょう。

2014/07/10 流遠亜沙

『機獣少女ソイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る